Osaka University Knowledge Archive

Title	動詞の第二中止形のアスペクトと述語らしさ：シテイテとシテの比較
Author(s)	森田, 耕平
Citation	現代日本語研究. 2021, 13, p. 27-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88320
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

動詞の第二中止形のアスペクトと述語らしさ

―シテイテとシテの比較―

Aspect and Predicateness of the Second Non-finite Forms of Verbs:
Comparing *Shiteite* and *Shite* Forms

森田　耕平
MORITA Kohei

キーワード：動詞，中止形，アスペクト，文の成分，述語

要　旨

本稿は，動詞の第二中止形の述語らしさについて，アスペクトに注目して記述したものである。分析では，シテとシテイテを比較して相互に言い換えができる場合とできない場合を取り出し，それぞれ定形動詞のアスペクトや中止形の動詞のタイプといった構文的特徴から記述した。そして，中止形のアスペクト的性質や文の成分の観点からシテとシテイテの述語らしさを考察し，次のような結果を得た。定形動詞が完成相の場合，シテイテはアスペクト形式として独立している点で最も述語らしい。定形動詞が継続相の場合には，シテイテとシテは独立したアスペクト形式とは言えないものの，述語らしい機能を果たす場合がある。一方で，シテにはアスペクト対立を持たず，従属的または複合的な関係の中で用いられ，述語らしいとは言えない場合がある。

１．本稿の目的

本稿の目的は，動詞の第二中止形が用いられる文を，アスペクトを手がかりに分析し，文における動詞の第二中止形の述語らしさを記述することである。

本稿では，「歩いて」のようなシテと，その有標のアスペクト形式である「歩いていて」のようなシテイテが用いられている文を分析の対象とする。そして，(1)(3)のようにシテイテまたはシテを相互に言い換えられない（言い換えると

意味が変わるか，不自然になる）場合と，(2)のように言い換えられる（意味が変わらない）場合があるという言語事実に注目する。両形式には意味・機能の異なりと重なりがあると考えられることから，記述の手順として，まず二つの形式の言い換えが可能かどうかを比較検討し，それぞれを文法的特徴から分類する（４節）。そのうえで，両形式の言い換えによる分析を踏まえて，それぞれの形式の述語または副次的な文の成分としての意味・機能を考察する（５節）。

(1) 私は海岸を｛歩いていて／歩いて｝，めずらしい形の石を**拾った**[1)]。

(2) 祖母は縁側に｛座っていて／座って｝，お茶を**飲んでいた**。

(3) 彼は｛しゃがんで／？しゃがんでいて｝靴紐を**結んでいた**。

本稿の分析が重視する文の特徴は森田(2017)と共通する。まず，中止形と定形動詞の相関を重視する。定形動詞は文末にあって文の叙述を完結させる主要な述語であり，中止形は定形動詞との関係のなかでその副次的な意味・機能を発揮するからである。そのうえで，二つの動詞のアスペクトに注目し，定形動詞のアスペクトとの相関のもとでの，シテイテとシテのアスペクト的性質や対立のあり方を検討する。また，第二中止形と定型動詞が表す二つの出来事間の関係も重視する。具体的には，アスペクトによって構成される時間的関係や，動詞のタイプによって規定される役割的関係を取り上げる[2)]。

本稿は，第二中止形における，述語の文法的カテゴリーとしてのアスペクトや副次的な意味のあり方から，シテイテとシテを比較して記述することで，その述語あるいは他の文の成分としての機能を明らかにする。

２．先行研究

工藤(2014：62)によれば，動詞は述語になることを主要な機能とする品詞であり，その終止形において，ムード・テンス・アスペクトの形態論的体系が全面開花する。対して，中止形はムード・テンスを欠き，終止形がその意味を表す。アスペクトについては，中止形には形式上，完成相相当のシテと継続相相当のシテイテという対立がある。しかし，工藤(2014)も指摘するように，その意味・機能のあり方は，終止形の場合とは異なる。このことは，(2)のように，シテとシテイテのどちらの形式を用いてもよい場合があるという言語事実からも推察される。

第二中止形の述語らしさとアスペクトに関して，本稿が直接依拠する先行研究として高橋(2003)，奥田(1989)，森田(2017)を取り上げ，その指摘と本稿が取り組むべき課題を述べておく。

高橋(2003)は，動詞が述語でなくなる場合の一つとして中止形を取り上げ，その部分的な述語性と，述語性を保ちつつ状況語として機能する場合，述語性を失って修飾語などの成分として機能する場合について述べている。さらに，中止形における完成相と継続相の意味・機能の異なりも指摘している(高橋 2003：234-239)。奥田(1989)は，動詞の第二中止形が定形動詞に対して従属的な関係を表現することを前提に，その意味的な関係の構造を記述している。シテの副詞化の傾向をとらえるとともに，シテイテ(継続相の形)が，定形動詞が表す出来事に対して「状況」として働くことも指摘している(奥田 1989：42)。

これらの記述は，動詞の第二中止形の意味・機能の広がりと変容をとらえている点，また，シテとシテイテの両方を記述の対象とし，シテイテのアスペクト的特性を踏まえてその文法的・意味的特徴に言及している点で重要である。一方で，主要な述語である定形動詞との関係や，中止形の動詞のタイプといった観点から明示的な法則化を行っているわけではない。

そこで，森田(2017)では，まずシテを主な対象として，定形動詞の相関のもとでの意味のあり方を文法的に記述することを目指した。その結果，定形動詞のアスペクトと中止形の動詞のタイプによって出来事間の関係が規定されることを示した。また継続相相当形式のシテイテについて，アスペクト的性質からその意味・機能を記述し，一部，シテとの関係にも言及した(森田 2017：125)。

しかし，上記いずれの先行研究においても，第二中止形におけるアスペクト対立のあり方を，終止形との異なりを明らかにしつつ，体系的に記述するには至っていない。また述語の文法的カテゴリーとしてのアスペクトのあり方から，中止形がどのように述語らしく機能するのか，あるいは述語らしくなくなるのかを検討するという課題も残されている。そのためには，(1)～(3)のようなシテとシテイテの使用に関する基本的な言語事実の観察と記述が必要となる。

３．データと分析対象

分析する用例は，すべて戦後に発表された小説作品から収集した。その収集

方法と総数は表1の通りである。まず,「手作業①」は，作品冒頭から150例の範囲で収集したすべての形式の中止形のうち，シテおよびシテイテの例の数である(30 作品分)。「手作業②」は，作品全体から収集したシテイテの例の数である(32 作品分)。「手作業③」は，作品全体から収集したシテの例[3)]の数である(26作品分)。「電子検索」は,『新潮文庫の100冊』の作品全体から収集したシテイテの例の数である(35作品分)。

表1：用例の収集方法と数

	手作業①	手作業②	手作業③	電子検索	計
シテイテ	99	656	−	1,297	2,052
シテ	2,667	−	2,227	−	4,894

分析の対象は次のように限定する。まずシテイテは，アスペクト対立のある動詞で，動作継続，結果継続を表す場合に限定し，他のアスペクト的意味(パーフェクト，習慣，単なる状態)を表す場合は対象外である。次にシテは，工藤(1995)の運動動詞の場合に限定し，内的情態動詞，静態動詞の場合は対象外である。定形動詞は，運動動詞の叙述法断定・肯定，完成相または継続相の場合に限定し，その他のムード・モダリティ形式，否定形式の場合や，他のアスペクト的意味を表す場合は対象外である。

そして本稿では，中止形がシテイテで定型動詞が完成相または継続相である文と，中止形がシテで定型動詞が継続相である文，つまり中止形か定形動詞の少なくとも一方が有標のアスペクト形式である文を分析する。本来，中止形のアスペクト体系を全面的に明らかにするには，中止形がシテで定形動詞が完成相である文のふるまいをも分析する必要があるが，本稿では対象外とする。

4．シテイテとシテの言い換えによる分析

本節では，シテイテとシテの言い換えに基づく分析を行う。シテイテをシテに言い換えられない場合(4.1.節)，シテイテとシテを相互に言い換えられる場合(4.2.節)。そして，シテをシテイテに言い換えられない場合(4.3.節)を，それぞれ構文的特徴から分類・記述する。

４．１．シテイテをシテに言い換えられない場合

まず，シテイテの実例において，シテイテをシテに言い換えると意味が変わってしまう場合を，「言い換えられない場合」として記述する。

この場合の構文的特徴は，定形動詞のアスペクトが完成相であることである。定形動詞が完成相であるとき，(4)(5)のように，シテイテと定形動詞は，部分的同時の時間的関係にある出来事を表している(森田 2017：116)。シテに換えると，第一に，文のなかの出来事間の時間的関係が変わる。(4’)(5’)では，出来事間の時間的関係が部分的同時から継起になる。

(4) 駐車場に内田のワゴンが停まっていて，春樹が**乗り込んだ**。中にはすでに数人いる。　(空中ブランコ)

(5) そのあいだに事態はさらに進展していた。郷里の有力者が集っていて，こう**言う**。／「われわれもいろいろと相談したのだが，あなた以外に適当な候補者がいない。(後略)」　(山本五十六)

(4’)駐車場に内田のワゴンが停まって，春樹が**乗り込んだ**。

(5’)郷里の有力者が集って，こう**言う**。

言い換えによって時間的関係とともに役割的関係にも変化が生じる。役割的関係からみれば，シテイテが表す継続的な出来事は，完成相の定形動詞が表す点的な出来事をとりまく「状況」としての出来事を表す。(6)(7)では，シテイテは定形動詞が表す主たる出来事に対して，それと同時的に存在し，その発生の原因となる状況を表している。(8)(9)では，(6)(7)のように因果関係は明確でないが，シテイテはやはり，主たる出来事の発生の状況を表している。これらの例のシテイテをシテに言い換えると，主たる出来事と同時的に存在する状況としての出来事ではなく，主たる出来事に先行して成立し，それを発生させる原因や手段，契機となる出来事を表す。また，このような異なりのために，(10)のようにシテをシテイテにすると不自然な文になる場合もある[4)]。

(6) 喫茶店を出ると彼は警視庁の方へ歩いて行った。日比谷の交差点では赤信号が｛出ていて／出て｝，長々と**待たされた**。　(点と線)

(7) ツカちゃんは，理科の授業中，実験用の机に備え付けの水道で｛遊んでいて／遊んで｝山本先生に**叱られた**。　(エイジ)

(8) 好太郎さんのところでは戦争中に銀杏の大木を供出して，そのとき株

根を｛掘っていて／掘って｝三石入りの備前焼の水甕を**掘りあてた**。（黒い雨）

(9) その学籍簿を｛読んでいて／読んで｝，突如として耕作は**気づいた**のだ。（そうか，あれはこの子の兄だったのか）（泥流地帯）

(10) そして突然，この春のことだ，ぼくは街を｛歩いていて／？歩いて｝，不意になんの理由もなく，怯えた子供らの一群から石礫を**投げられた**。（空の怪物アグイー）

シテとシテイテを同じ範囲から収集した手作業①の用例数を見ると，シテイテの出現頻度はシテに比べて圧倒的に少ない。また次節で見るように，シテイテをシテにしてもよい場合もあることから，シテイテは，シテに比して周辺的な形式であると言える。しかし，ここで確認したように，定形動詞が完成相であって，シテイテが部分的同時の時間的関係や，状況という役割的関係を表す場合には，シテイテはシテで代替できない固有の意味・機能を有している。

４．２．シテイテとシテを相互に言い換えられる場合

次に，シテイテとシテの両方の実例を観察し，シテイテの実例をシテに言い換えられる場合（4.2.1.節）と，シテの実例をシテイテに言い換えられる場合（4.2.2.節）の二つの方向から考える。

分析の内容を先取りすると，まず，定型動詞が継続相である場合に，相互の形式の言い換えが可能になる。シテイテからシテへの言い換えには，その他の構文的特徴は関わらない。一方，シテからシテイテへの言い換えは，他の構文的特徴によって可否が分かれる。言い換えの可否に関わる特徴は，二つの出来事の主体の同一性と，中止形の動詞のタイプである。そこで，以下では，これらの構文的特徴からシテイテの用例を整理することにする。

４．２．１．シテイテをシテに言い換えられる場合

シテイテの実例を検討し，文の意味を変えずにシテへ言い換えられる場合を確認する。「文の意味を変えずに」というのは，より正確には，第一にシテイテと定形動詞が表す二つの出来事の時間的関係を変えないということである。

前述したように，言い換えが可能な条件は定形動詞が継続相であることであ

る。このとき，シテイテと定形動詞は全面的同時の時間的関係にある出来事を表す(森田 2017：116)。一方，シテは継続相相当形式ではなく，結果や動作の継続を表すわけではないが,主たる出来事と同時的に存在する出来事を表す(森田 2017:126)。この同時性という点で,二つの出来事の時間的関係は共通する。

(11)昭八ちゃんの姉さんも{来ていて／来て}，胸にカメラをぶら下げた昭八ちゃんが，プログラムを開いて何か**話をしている**。 (閉鎖病棟)

(12)入口すぐにある接客用の椅子には安和寅吉が一人で{腰掛けていて／腰掛けて}，珈琲を**飲んでいた**。 (姑獲鳥の夏)

主体の同一性については，(11)(13)(14)のように異主体の場合でも，(12)(15)(16)のように同一主体の場合でもシテイテをシテに言い換えられる。

(13)教えてもらった通りに歩いて行くと，すぐに酒店は見つかった。／シャッターが{上がっていて／上がって}，往来に明かりが**漏れていた**。 (きつねのはなし)

(14)田岡さんが，都会でも外国人の犯罪が増えているのだと滔々と{話していて／話して}，周りの男たちは顔をしかめては何度も**うなずいていた**。 (私の男)

(15)内藤は先に{来ていて／来て},憂鬱そうな顔でコーヒーを**呑んでいた**。 (一瞬の夏)

(16)壁に取りつけた扇風機は{故障していて／故障して}，不在の村民課の課長の机ばかりに風を**送っている**。 (死国)

シテイテの中止形の動詞のタイプについて確認しておく。次節で見るように,シテからシテイテへの言い換えの可否に動詞のタイプが関与するのは，二つの出来事の主体が同一である場合である。そこでここでは，シテイテの動詞のタイプとそれに応じたアスペクト的意味(結果継続か動作継続か)の違いに関わらず，シテへの言い換えができることを，同一主体の例によって示す。

(12)(15)(16)と次の(17)～(19)はシテイテが主体変化動詞であり，結果継続を表す場合である。

(17)石段の途中に中学生が腰を{おろしていて／おろして}，単語カードを**暗記していた**。 (樹々は緑か)

(18)千代子はちょうど夏場所八日目の大相撲見物に両国へ{行っていて／

行って}，神谷町の家を**留守にしていた**。　（山本五十六）

(19)深い切込みから白い足を大胆に見せて歩く若い母親が連れている子供は，尻の部分が割れたズボンを｛はいていて／はいて｝，猿のように赤くなった尻を**丸出しにしている**。　（赤い月）

一方，同一主体の文において，シテイテが主体動作動詞または主体動作客体変化動詞であって動作継続を表す場合は，実例が見られない（(14)はシテイテが動作継続を表す例だが，異主体の文である）。作例でも(20)(21)のように同一主体の二つの動作をシテイテで表現することは難しい。このことは，次節以降，シテからシテイテへの言い換えを考える際にも重要である。

(20)？そのとき彼はコーヒーを飲んでいて，ケーキを**食べていた**。

(21)？彼は大きく腕を振っていて，**歩いていた**。

４．２．２．シテをシテイテに言い換えられる場合

次に，シテの実例から，シテイテに言い換えられる場合を確認する。前述のように，言い換えの可否には，定形動詞が継続相であることだけでなく，主体の同一性と，シテの動詞のタイプが関わっている。

まず，主体の同一性について確認しておく。シテと定形動詞が表す二つの出来事の主体が異なる場合は，シテをシテイテに言い換えられる[5)]。

(21)どの家も｛傾いて／傾いていて｝壁が**くずれていた**。　（黒い雨）

(22)信吾が応接間へ行くと，英子は椅子に｛かけて／かけていて｝，もう一人の女は**立っていた**。　（山の音）

一方，出来事の主体が同一の場合については，シテの動詞のタイプに基づく役割的関係[6)]によって言い換えの可否が分かれる。以下，言い換えられる場合を，二つに分けて示す。

①シテが主たる出来事と並列的な主体の結果状態を表す場合

シテと定形動詞が並列的な関係にある出来事を表す場合，シテをシテイテに言い換えられる。しかし，動詞のタイプと並列される出来事は，何でもよいわけではない。明らかに言い換えられるのは，シテが主体変化動詞であって，主体の結果状態が並列される場合である[7)]。具体的には，(23)(24)のように装着動詞や所持動詞による場合，(25)のように姿勢変化動詞による場合[8)]がある。

文全体としては，ある主体の，服装や持ち物，姿勢といったいくつかの外見的特徴をまとめて表現している。一方，シテが主体動作動詞や主体動作客体変化動詞で，二つの動作を並列しているような例は，(26)を除いてほとんど見られなかった。シテイテへの言い換えも不自然に感じられる。

(23)「どんなお姉ちゃんだ？」／「とても凄いのよ。ハイカラな縞の外套を｛着て／着ていて｝，ナイロンの靴下を**はいてた**わ。黒いぴかぴかのハンドバッグをさげてたわね。(後略)」　(浮雲)

(24)小母はんは手拭を｛被って／被っていて｝，空の目籠を**背負っていた**。　(黒い雨)

(25)花は俺のとなりにちょこんと座った。ちいさな子供のように膝を｛抱えて／抱えていて｝，裸の痩せたからだをちいさく**丸めている**。　(私の男)

(26)成瀬は食欲がないようで，コーヒーばかり｛飲んで／？飲んでいて｝タバコを**ふかしている**。　(顔に降りかかる雨)

②シテが位置変化動詞か姿勢変化動詞で，出来事が実現する場所を表す場合

シテには，主体変化動詞のうち位置変化動詞または姿勢変化動詞であり，場所を表すニ格名詞と組み合わさって，主体が存在し，主たる出来事が実現する場所を表している場合がある(森田 2017：62)。この場合にも，シテをシテイテにすることができる。(27)(28)は位置変化動詞による場合，(29)(30)は姿勢変化動詞による場合である。

(27)眼下にわが家が意外に小さく見える。良子が家の前に｛出て／出ていて｝こっちを**見上げている**。　(泥流地帯)

(28)「おい戻ったぞ。強行軍で戻って来た。おい，遠来の客人は，いつごろ見えたんか」(中略)シゲ子は裏手を流れる溝川の洗い場に｛出て／出ていて｝，暗くなったのに洗濯物を**漱いでいた**。　(黒い雨)

(29)(前略)いつかの田所という名の女性店員がひとり，背の高い箱火鉢のそばに｛立って／立っていて｝所在なげに手の甲を**さすっていた**。　(白夜を旅する人々)

(30)釣りの男は風のこない二段目の堤防に｛すわって／すわっていて｝のんびり煙草を**ふかしていた**。　(岳物語)

上記①②の場合は，原則言い換えが可能であるが，テクストの中での主体の性質によって，言い換えがしにくくなる可能性がある。主体が視点人物以外の事物であり，その描写をする文ではシテをシテイテに言い換えられる((23)～(30)はすべて主体が視点人物でない)。一方で，(31)のように視点人物が主体である文では，シテイテが不自然になることがある。(32)(33)では言い換えても不自然ではないが，あえて自分自身を客観的に描写するために，シテイテによって事柄を取り立てて表現しているような文脈が必要になると思われる。

(31)洪作は鹿の柵のところへ{行って／？行っていて}，何の苦労もなさそうな鹿の動きを**見ていた**。ここに仕合せな生きものが生きていると思った。　(夏草冬濤)

(32)僕はスーツを｛着て／着ていて｝，例の水玉のネクタイを**しめていた**。　(ねじまき鳥クロニクル)

(33)自分は中学時代の友人を訪ねるといって家を出てきた。(中略)ところが，自分は父の在所の村に｛きて／きていて｝，こうして湯宿の古畳に**寝そべっている**。　(白夜を旅する人々)

なお，ここまでの例は主体がすべてヒトであるが，主体がモノであって，シテがその非意志的な結果状態を表す場合も，基本的に並列的な場合や，主たる出来事の場所を表す場合には，シテイテに言い換えられる。しかし，(34)(35)のように，そのいずれとも言えない場合でも，言い換えができそうである。シテがモノの非意志的な結果状態を表す場合については，用例の十分な検討と基本的な意味関係の記述がまだできていないため，用例を挙げるにとどめる。

(34)鍋の底では米粒が｛つぶれて／つぶれていて｝，黄色くぐしゃぐしゃに**乱れていた**。　(私の男)

(35)気がつくと，あれほどあきらかだった月が雲に{隠れて／隠れていて}，半透明に**なっている**。　(橋づくし)

４．３．シテをシテイテに言い換えられない場合

本節では，定形動詞が継続相で，二つの出来事の主体が同一の場合という条件において，シテをシテイテに言い換えられない場合を取り上げる。

シテをシテイテに言い換えることできない典型的なケースは，シテが主たる

出来事の具体的な方法や側面を表す場合(森田 2017：106-109)である。次節で行う述語らしさについての考察を先取りすることになるが，このような場合，シテは主要な述語である定形動詞に対して修飾語的に機能しており，従属性・副次性が最も高い。また，(36)(37)のように，シテが定形動詞の直前にある場合，言い換えは明らかに不自然である。

(36)四人の楽士がそれぞれ木で作った楽器を{ならして／？ならしていて}**伴奏している**。　(深い河)

(37)人の歩いて来る気配で，富岡が，ふっと後を振り返ると，意外な事には，幸田ゆき子が，白いスカートをなびかせながら，急ぎ足で｛歩いて／？歩いていて｝**来ていた**。　(浮雲)

(38)教室へはいって行くと，この春東京の官立大学を出て，すぐこの中学校へ就職して来た神代という若い教師が，独特のきいろい声を｛張り上げて／？張り上げていて｝，英語のリーダーを**読んでいた**。(夏草冬濤)

(39)バーテンの福原は肩から力を｛抜いて／？抜いていて｝二人と**やりあっている**。　(眠り猫)

しかし，これ以外にも，シテをシテイテに言い換えられない場合がある。中止形の動詞のタイプとそれに応じた役割的関係から，三つの場合に整理する。

①シテが主体変化動詞で，副次的な主体の結果状態を表す場合

この場合は，シテが主体変化動詞であり，主たる出来事に対して同時的に存在する，主体における副次的な結果状態を表す。(40)～(42)はシテが姿勢変化動詞，(43)～(45)は所持動詞，(46)(47)は装着動詞で，それぞれ，主たる出来事が実現する際の姿勢や持ち物，服装を表している。前節の①の主体の結果状態が並列される場合と，シテの動詞のタイプは共通しているが，この場合はシテが表す結果状態が定形動詞に副次的な資格で関係している点で異なる。

(40)成瀬は｛屈んで／？屈んでいて｝ワークブーツの靴紐を丁寧に**かけている**。　(顔に降りかかる雨)

(41)父親の姿はベンチになかった。怪訝に思って周囲を見回すと，宝くじ売り場にいた。こどもの目には壁のように大きく見える背中を｛丸めて／？丸めていて｝，くじを**買っていた**。　(はずれくじ)

(42)男は目を｛伏せて／？伏せていて｝煙草を**吸っていた**。　(離宮の松)

(43) 煉瓦の煙突の家の周囲を近隣の人がバケツや桶を｛持って／？持っていて｝**走り廻っていた**。（八甲田山死の彷徨）

(44) 菊子が新聞を｛持って／？持っていて｝，廊下に**立っていた**。（山の音）

(45)「下駄屋の小母さんなら，さっき，若い衆宿の横で，子供を｛おぶって／？おぶってて｝，蜜柑**食べてた**ぞ」（夏草冬濤）

(46) ボックスじみた売場の中では中年の女が一人，事務服に似た制服を着て／？着ていて｝所在なげに**坐っていた**。（黒祠の島）

(47) 耳門から邸内へはいって行くと信者ででもあろうか，痩せ細った中年の女が，大麦藁帽子を｛かぶって／？かぶっていて｝，庭の**草むしりをしていた**。（浮雲）

定形動詞が表す主たる出来事に対して副次的な（並列的でない）主体の結果状態を表していても，(48)～(50)のように言い換えられそうな場合もある。

(48) 譲られた子はうれしそうに笑ったけれど，暁はがっかりしたように肩を｛落として／落としていて｝，離れていく花の背中をじっと**見送っていた**。（私の男）

(49) 三人が帰ってすぐ入れかわりに妻が帰ってきた。帰りがけに何かしこたま買い込んできたらしくスーパーマーケットの大きな紙袋を三つも｛かかえて／かかえていて｝，額のあたりにうっすらと汗まで**浮かべていた**。（岳物語）

(50) 夏の日ざかりだというのに，その男は黒い長袖のポロシャツを｛着て／着ていて｝，じっと沖を**見ていた**。（すいばれ）

このような場合にシテイテに言い換えられる理由を十分に説明することは難しいが，中止形が表す出来事が，それに先行する部分で述べられた事柄（波線の箇所）との間に緊密な関係を持っていることが一つの特徴である。中止形は，後続する定形動詞に対して副次的な資格で関わる一方で，先行する部分に対して，その対比や帰結となるような独立した出来事を述べる述語として機能しうるため，シテイテにできるのではないかとも考えられる。

②シテが主体動作動詞で，主たる出来事に対する副次的な動作を表す場合

シテが主体動作動詞の場合は，主たる出来事と同時的関係にある副次的な動

作を表す(森田 2017：91)。主体動作動詞が表す出来事(動作)には，(51)(52)の客体との接触，(53)～(55)の客体の動き，(56)の言語活動など，様々なタイプがあるが，いずれもシテイテに言い換えることはできない。

(51)ゆき子は富岡の腕を｛摑んで／？摑んでいて｝，小刻みに**震えている**。
(浮雲)

(52)ママは客の背を｛叩いて／？叩いていて｝笑い声を**あげていた**。
(眠り猫)

(53)太郎は満足そうに足を｛ゆすって／？ゆすっていて｝私の背の上で**おどっている**。 (リツ子・その死)

(54)大塩さんも，いつのまにか幼子のように身を｛震わせて／？震わせていて｝**泣いていた**。 (私の男)

(55)うっすら雪にまぶされた起伏に富む牧場では,何十頭もの馬が雪を｛蹴散らせて／？蹴散らせていて｝**駈けていた**。 (優駿)

(56)「嫁入り仕度なんぞ，いらね」／　この間富は，何のことからか，そう激しく｛言って／？言っていて｝祖父母の前で**泣いていた**。
(泥流地帯)

③シテが主体動作客体変化動詞で，客体の結果状態を表す場合

シテが主体動作客体変化動詞の場合も，シテイテに言い換えることができない。主体動作客体変化動詞の言い換えについては，①主体変化動詞，②主体動作動詞の場合とは異なった性質がある。述語らしさに関わる点は次節で述べることにして,ここでは動詞のタイプに関わる点から,例を挙げて説明しておく。

それは，シテをシテイテにすると，結果状態ではなく動作を表すことになることから，言い換えの不自然さが生じるという点である。主体動作客体変化動詞は，主体の動作と客体の変化を表す。定形動詞が継続相であれば，シテは主たる出来事と同時的に存在する客体の結果状態を表す(森田 2017:43)。しかし，主体動作客体変化動詞の継続相は結果継続ではなく動作継続を表すことから，シテもシテイテにすると継続的な動作を表すようになる。すでに見たように，二つの出来事の主体が同一の文において，シテイテによって同時的な動作を表すことはできない。仮にシテイテへ言い換えたとしても，シテイテが継続的な動作を表す限り，主たる出来事と同時的に存在する客体の結果状態を表すとい

う，もとの関係は損なわれてしまう。

(57) 女たちはそれぞれガートの露店で買った花びらを木の葉に｛のせて／？のせていて｝水に**流している**。（深い河）

(58) 菊子が新聞を｛積み重ねて／？積み重ねていて｝，紐で**束ねていた**。（山の音）

(59) 清吾は，枕許に手巻きの蓄音機を｛引き寄せて／？引き寄せていて｝，横になったまま音のかすれた室内楽を**聴いていた**。（白夜を旅する人々）

(60) この樹蔭にひとしい小屋のなかに，一人の老婆が青萱を｛敷いて／敷いていて｝**仰向けになっていた**。（黒い雨）

(61) 昨夜拓一が，竹筒の貯金箱を｛あけて／？あけていて｝，金を**数えていた**。（泥流地帯）

５．述語らしさの検討

本節では，シテイテとシテの言い換えによる分析に基づき，分類したそれぞれのケースについて，定形動詞との相関のもとでの第二中止形のアスペクトのあり方，副次的な述語や他の文の成分（修飾語や状況語）としての機能の面から，第二中止形の述語らしさを考える。アスペクトについては，定形動詞や他方の形式との関係で，独立しているかどうかという点も考慮する。以下，前節で取り上げた文のタイプを簡潔に示すため，「第二中止形がシテイテで，定形動詞が完成相の文」を［シテイテ＋完成相］といった形で表記する。

①［シテイテ＋完成相］：シテへの言い換え不可（4.1.節）

(62)(63)のような［シテイテ＋完成相］の場合，アスペクト的な特性から見れば，シテイテは，定形動詞のアスペクト（完成相）に対して独立したアスペクト的意味（継続相）を表し，シテイテをシテにすると二つの出来事間の関係（時間的関係，役割的関係）が変わる。独自のアスペクトの機能とシテとの対立を有している点で，シテイテは述語らしいと言える。

(62) 車が｛停まっていて／停まって｝，そこに男が**乗り込んだ**。

(63) 私は海岸を｛歩いていて／歩いて｝，めずらしい形の石を**拾った**。

一方で，文の成分としての機能から見れば，シテイテは，述語としてのみな

らず，副次的な文の成分である状況語として機能する場合がある。特に，(63)のような例では，同一主体の文において，より状況語らしい機能に傾斜している。

②［シテイテ＋継続相］：シテへの言い換え可(4.2.1.節)

(64)(65)のような［シテイテ＋継続相］の場合も，［シテイテ＋完成相］の場合と同様に，形式上はシテイテが独立したアスペクト的意味(継続相)を表しているかに見える。しかし，［シテイテ＋完成相］の場合と異なって，シテイテをシテに言い換えることができ，二つの出来事間の関係も変わらない。

(64)シャッターが｛上がっていて／上がって｝，中から光が**漏れていた**。

(65)祖母は縁側に｛座っていて／座って｝，お茶を**飲んでいた**。

［シテイテ＋継続相］の文では，継続相という独立したアスペクト的意味を持つ中止形の形式(シテイテ)を，そうでない形式(シテ)にすることができる。シテにした場合，中止形のアスペクト的意味の表現は，定形動詞のアスペクトにゆだねられる。従って，形式上はシテイテが用いられていても，実はそのアスペクトは完全に独立しておらず，シテとの対立関係はない。この場合のシテイテは，［シテイテ＋完成相］の場合に比べて，述語らしさが低いことになる。

③［シテ＋継続相］：シテイテへの言い換え可(4.2.2.節)

既に述べたように，［シテ＋継続相］の文において，シテは，シテイテとは異なって，独立したアスペクトを表す形式ではない。しかし，シテをシテイテに言い換えられる場合は，それによって独立したアスペクト的意味を持たせることができる。この点で，シテをシテイテに言い換えられない場合に比べれば，述語らしい性質もあると言える。

(66)雨は｛上がって／上がっていて｝，日が**さしていた**。

(67)その日父はスーツを｛着て／着ていて｝，革靴を**履いていた**。

(68)妻はベランダに｛出て／出ていて｝，布団を**干していた**。

言い換えができる三つのケースについて，それぞれ文の成分としての機能を考える。まず(66)のように二つの出来事の異主体が異なる場合は，シテは，主要な述語(定形動詞)に対するのとは異なる主語に対する述語として機能している。次に，(67)のように二つの出来事が同一主体で，シテが並列的な出来事を表す場合は，定形動詞が表す主たる出来事に対する関係において(次に見るシ

テをシテイテにできない場合に比して）対等の関係にある述語として機能していると言える。また，(68)のようにシテが主たる出来事の場所を表す場合には，主たる述語に対して副次的な出来事を表現している点で述語らしいとは言いにくく，文の副次的な成分である状況語的に機能している。ただし，シテイテに言い換えることができる点，シテイテにした場合には，主体の存在や所在を表す文の述語として機能しうる点で，次に見るシテが修飾語的に機能する場合に比べると述語らしさがあると言えるかもしれない。

④［シテ＋継続相］：シテへの言い換え不可（4.3.節）

定形動詞が継続相であってもシテをシテイテに言い換えられない場合，中止形に独自のアスペクト的意味を持たせることはできない。形式的なものであれ，述語に備わる文法的なカテゴリーとしてのアスペクトの対立を有しているとは言えないという点で，述語らしさは低いといえる。

(69)その生徒は大声を｛出して／？出していて｝教科書を**読んでいた**。

(70)彼は｛しゃがんで／？しゃがんでいて｝靴紐を**結んでいた**。

(71)男の子は体を｛ゆすって／？ゆすっていて｝**踊っている**。

(72)夫は新聞を膝の上に｛のせて／？のせていて｝ゆっくり**読んでいた**。

では，述語以外の文の成分としての機能はどうだろうか。まず，シテが(69)出来事の側面，(70)副次的な主体の結果状態，(71)副次的な動作を表す場合は，主たる出来事を詳しくする修飾語として機能している。主たる出来事と同時的に存在・進行する出来事であっても，シテイテに言い換えることで，独自のアスペクト性を持つ出来事として表現することができないと考えられる。

次に，(72)のように客体の結果状態の場合については，前述したように，他のケースとは異なった性質がある。それは，二つの出来事の複合性（ないし一体性）という点である。二つの出来事の間には，「客体の変化が先行して成立し，その結果状態が主たる出来事と同時的に存在している」という関係があり，多くの場合，客体の結果状態は，主たる出来事に対して意図的に準備されるものである（森田 2017：33）。文法的には，(57)(58)(72)のようにシテと定形動詞が表す出来事の客体が同一である場合もある。

このような関係の中にあるシテが，①②と同様に修飾語的に機能しているとは言いにくい。しかし，上記のような意味的・文法的な特徴によって，二つの

出来事はかたく結合し，その複合性は高い。その場合に，シテをシテイテにすると，結果ではなく動作を表すようになるという変化とともに，客体の結果を媒介とした二つの出来事の複合的な関係が切り離されてしまうと考えられる。

６．おわりに

以上，シテとシテイテを比較し，それぞれが用いられる文の構文的特徴，特に定形動詞との相関やアスペクトに注目して，動詞の第二中止形の述語あるいは他の文の成分としての機能を考察してきた。シテイテにはアスペクト対立とそれに基づく述語らしさが認められる場合，シテにはそれが認められない場合があること，シテイテとシテには意味・機能の重なりがあり，その場合，アスペクトの独立性と述語らしさは減じることを中心に述べた。

中止形の述語らしさをとらえるには，文の成分の観点のみならず，アスペクト的側面をも考慮することの必要性は，強調しておきたい。シテにシテイテとの対立が認められない場合に，シテにアスペクト性が全くない，ないしアスペクト的観点から性質を考える必要がない，というわけではないだろう。出来事のタイプ(動作か結果か)，あるいは他の出来事との時間的関係には，アスペクト的側面の検討が必要であり有効であると考える。

分析対象の箇所（３節）でも述べたように，動詞の中止形のアスペクトの真に体系的な記述のためには，本稿で扱っていない「中止形がシテで，定形動詞が完成相の文」を分析することが必要となる。有標のケースを対象とした本稿の分析で取り出した観点，特に構文的特徴や出来事間の関係に応じたアスペクトの独立性が，その記述においても活かせるものと考えている。

注

１)出典に下線のないものは手作業で収集した用例，下線のあるものは電子検索で収集した用例，出典のないものは作例である。例文中，シテは二重線，シテイテは破線，定形動詞は**ゴシック**，「／」で改行を示す。

２)本稿では「出来事間の関係」に時間的関係，役割的関係の二つを認める。詳細については森田(2017：5-7)を参照されたい。

３)「手作業③」では後続の述語が動詞の継続相・完成相の場合に限定した。

4）シテイテの実例には，以下の一つ目の例のようにシテにしても意味が変わる（継起的になる）とは言いにくい場合や，二つ目の例のように定形動詞のアスペクトによらずシテへの言い換えが不自然になる場合もあるが，いずれも用いられている動詞の個別的な性質によるものと考えている。

・小島は風呂敷包みを｛持っていて／持って｝，いまの男からおまえに差入れだ，と**云った**。（さぶ）

・弁当にはまた梅干が｛はいっていて／？はいって｝，私は指さきで掘り出して土手のむこうへ**投げすてた**。（驢馬）

5）異主体の文の実例では(21)のように主体がモノの場合が中心で，ヒトが主体である(22)のような例は少数であった。

6）シテの動詞のタイプに基づく役割的な意味については，森田(2017)の第4章（主体動作客体変化動詞），第5，6章（主体変化動詞），第6章（主体動作動詞）の記述に基づいている。詳細はそちらを参照されたい。

7）内省による判断では言い換えができるものの，シテイテの実例で，こうした主体の特徴を並列する文は収集されていないことを付言しておく。

8）この箇所および 4.3.節①で言及する主体変化動詞の下位類とそれらが表す役割的関係については，森田(2017)の第4章（姿勢変化動詞），第5章（所持動詞，装着動詞）で記述している。

用例出典　（文庫底本の出版社・刊行年，短篇の初出年は省略した）

［手作業①～③によるもの］

浅田次郎(2000)『霞町物語』講談社文庫より「すいばれ」／井上靖(1989)『夏草冬濤』新潮文庫／井伏鱒二(1970)『黒い雨』新潮文庫／大江健三郎(1972)『空の怪物アグイー』新潮文庫より「空の怪物アグイー」／遠藤周作(1996)『深い河』講談社文庫／奥田英朗(2008)『空中ブランコ』講談社文庫より「空中ブランコ」／小野不由美(2007)『黒祠の島』新潮文庫／川端康成(1957)『山の音』新潮文庫／京極夏彦(1998)『文庫版　姑獲鳥の夏』講談社文庫／桐野夏生(1996)『顔に降りかかる雨』講談社文庫／桜庭一樹(2007)『私の男』文春文庫／椎名誠(1989)『岳物語』集英社文庫／重松清(2003)『ビタミンF』新潮文庫より「はずれくじ」／重松清(2004)『エイジ』新潮文庫／檀一雄(1950)『リツ子・その

死』新潮文庫／なかにし礼(2003)『赤い月』新潮文庫／新田次郎(1971)『八甲田山死の彷徨』新潮文庫／花村萬月(2004)『眠り猫』新潮文庫／帚木蓬生(1997)『閉鎖病棟』新潮文庫／林芙美子(1953)『浮雲』新潮文庫／坂東真砂子(1996)『死国』角川文庫／三浦綾子(1982)『泥流地帯』新潮文庫／三浦哲郎(1989)『白夜を旅する人々』新潮文庫／三島由紀夫(1968)『花ざかりの森・憂国』新潮文庫より「橋づくし」／三島由紀夫(1970)『真夏の死』新潮文庫より「離宮の松」／宮本輝(1989)『優駿』新潮文庫／村上春樹(1997)『ねじまき鳥クロニクル』新潮文庫／森見登美彦(2009)『きつねのはなし』新潮文庫

［電子検索によるもの］

阿川弘之(1965)『山本五十六』／井伏鱒二(1965)『黒い雨』／沢木耕太郎(1980)『一瞬の夏』／松本清張(1958)『点と線』／三浦哲郎(1961)『驢馬』／山本周五郎(1963)『さぶ』／吉行淳之介(1963)『樹々は緑か』

参考文献

奥田靖雄(1989)「なかどめ―動詞の第二なかどめのばあい」言語学研究会(編)『ことばの科学 2』pp. 11-47，むぎ書房.

工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現』ひつじ書房.

――――――(2002)「日本語の文の成分」『現代日本語講座　第 5 巻　文法』pp. 101-119，明治書院.

――――――(2014)『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房.

高橋太郎(2003)『動詞九章』ひつじ書房(初出は 1987 年「動詞(その 3)」『教育国語』90).

仁田義雄(1995)「シテ形接続をめぐって」仁田義雄編『複文の研究(上)』pp. 87-126，くろしお出版.

森田耕平(2017)『現代日本語における動詞の中止形の記述的研究』大阪大学文学研究科博士学位申請論文.

――――(2020)「存在動詞の第二中止形「いて」の意味・機能」『神戸大学留学生研究』4，pp. 1-32.

付記

本稿の内容は 2021 年 5 月 16 日の日本語教育誤用例研究会での発表を元にしている。研究会では張麟声先生（大阪府立大学）をはじめ有意義なコメントをいただいた。また，執筆にあたっては八亀裕美先生（琉球大学）からも多くの助言を得た。記して感謝の意を申し上げたい。

（大阪府立大学准教授）